

生活科教科書における幼小接続と遊びの単元

○ 福元 真由美 (東京学芸大学)

1. はじめに

本発表では、1989年の教科新設以降の生活科教科書を検討し、幼児期の教育と小学校教育の接続に関わる問題が、遊びによる学習においてどのように変化したのかを明らかにする。生活科は、新設時から低学年教育において幼小の関連を図る科目と考えられていた。その背景として、低学年児童の発達特性への適合、児童や児童をとり巻く環境の変化とともに、幼稚園から高等学校までの教育を一貫したものにすることが語られてきた。しかし、教科新設から20年以上経ち、幼小接続について「幼児と児童の交流活動や幼小の教職員の意見交換等の取組はある程度行われてきている」ものの、教育課程編成の実施状況を踏まえると「接続のための取組は十分実施されているとはいえない」とされる。

そこで今回は、学習活動として遊びを含む単元（以下、遊びの単元）を手がかりに、幼小接続の要とされた生活科で、教育課程の編成が停滞したどのような問題が生じていたのかを検討したい。これまで発表者は、幼小接続の観点が生活科の授業づくりにどのように導入されてきたかを教師用指導書を中心に検討するとともに、生活科教科書における遊びの配置と内容の変容を明らかにしてきた。本発表はこれらの研究に基づき、残された冒頭の課題を取り上げている。検討対象の単元を掲載する教科書は、採択の占有率で上位を占める東京書籍、啓林館、大日本図書、教育出版の4社から発行されたものにした。以下では、生活科教科書の初版及びその後の全面改訂時の版ごとに検討する。

2. 1991・1992年版教科書における理論中心の幼小接続

1990年刊行の『小学校 生活 指導資料 指導計画の作成と学習指導』（文部省）は、幼小の連携・接続の課題に応えるために、「具体的な活動を通して思考する」低学年児童の発達に適するよう教育内容を改善し、「遊びが学習活動に位置付けられたこと」に言及していた。また、砂遊びの場面を取り上げ、幼児期の活動からの連続・発展として児童の活動を捉え、指導する具体的な実践例を示していた。

しかし、1991・1992年版の生活科教科書では、遊びの単元においても、このような活動の理解と指導の必要を求める認識は希薄だった。遊びの単元は、第1学年で4～6（総単元数7～9）、第2学年で4～6（総単元数8～10）あり、いずれの学期にも配置されていた。第1学年と第2学年で遊びの連続、発展に考慮した単元の編成が見られるものの、各単元における幼児教育との関連は、主に第1学年前半の適応や児童に園での体験を想起させることに関して言及されるにすぎない。教師用指導書で幼小接続の観点が示されたのは、授業の構想のモデルを示した単元の解説よりも、それ以前に生活科の新設の経緯や児童の発達の特徴を述べた理論においてであった。それらの理論を土台とする幼小接続の観点は、当時の生活科教科書や教師用指導書を見る限り、授

業づくりの具体的な構想から切り離されていた。

3. 2002年版教科書における交流の重視

2002年版の生活科教科書では、年間の単元数が少なくなるとともに、遊びの単元数も特に第2学年で減少した。遊びの単元は、第1学年で3~6（総単元数4~6）、第2学年で1~2（総単元数4~5）である。これは、1998年の学習指導要領改訂で「ゆとり」の中で「特色ある教育」を展開することが目指され、教育内容が厳選されたことによる。遊びの単元は、第1学年に集中する傾向が見られるようになった。

幼小接続に関する事項について、学習指導要領改訂で身近な人々との関わりが重視されたことで、幼児との交流に関する内容が増えている。交流には、児童と幼児と一緒に活動する機会を計画的に設定する交流と、児童の活動の場に居合わせた幼児と触れ合う交流が含まれた。教師用指導書を見ると、配当時間内で取り上げられたのは后者であり、前者は配当時間外の活動となっている。いずれも幼児との交流は、児童の遊びによる学習活動の延長として位置づけられており、幼児期の遊びの連続性において児童の遊びを捉え、活動を構想する単元はほとんどなかった。

4. 2011年版教科書における学びの接続の具体化

2011年版の生活科教科書においては、幼児期の活動や経験と児童の学習との関連を示す記述が増加し、第2学年にも広がった。一部の教師用指導書では、幼児期の遊びと単元の関係が具体的に明示され、幼児期の経験との連続、発展において児童の学習を捉える授業づくりが促されている。その背景には、国際競争化する教育改革の中で幼小接続が義務教育改革の一環に位置づけられたこと、小1プロブレムが社会問題化したことで、幼小接続の充実、スタートカリキュラムの導入が進められた状況がある。

遊びの単元について、第1学年と第2学年では全く異なる傾向が見られた。遊びの単元数は、第1学年4~6（総単元数4~10）、第2学年1~2（総単元数5~11）となり、2002年版とあまり変わらない。一方、遊びの内容については、第1学年は遊びの種類が増え、さまざまな認識、経験の織り込まれた多様な活動が構想されるようになった。第2学年の遊びの単元は、2学期の動くおもちゃを作って遊ぶ単元にほぼ一本化された。第1学年で幼児期の教育との緊密な関連が見られるのに対し、第2学年では中学年以降の学習を視野に入れた学習が目指されている。

5. おわりに

以上の検討から、平成期に幼小接続の教育課程編成が滞った要因の一つとして、「遊び」を軸とする学習の連続性が見通しが困難だった点を指摘できる。生活科は学習に遊びを導入した教科として注目されたが、新設当初は遊びの単元でも幼児期の経験と児童の学習の関連づけは弱く、交流が重視されても幼児とその活動は児童の学習環境として一方的に把握されるに過ぎなかった。また、低学年2年間を通して遊び中心に教育課程を構想することは難しく、学びの経験の発展を捉える別の観点が要求されていた。